

【月刊】キリスト教書評誌

# 本のひろば

August 8  
2023

ISSN 0286-7001

一般財団法人キリスト教文書センター

1957年7月17日第三種郵便物認可

2023年8月1日発行(毎月一回1日発行)第788号

● 出会い・本・人

物語の力 田中 光

● 特集シリーズこの三冊!

〈キリスト教と哲学〉の関係を問い直す三冊

―ミシェル・アンリを読み継ぐ 阿部善彦

● 本・批評と紹介

N・T・ライト著／井出 新訳

すべての人のためのマタイ福音書2 本多峰子

小友 聡著 コヘレトと黙示思想 並木浩一

住谷 翠著 雅歌の説教 小友 聡

朴 賢淑著 咸錫憲におけるシアル思想の成立と展開 山本俊正

及川 信著 わたしが十字架になります 久松英二

J・P・ラジャシエカー 編著／宮本 新訳

アジアの視点で読むルターの小教理問答 江口再起

木原活信著

ジョージ・ミユラーとキリスト教社会福祉の源泉 山口陽一

湯浅八郎述／田中文雄 編／国際基督教大学博物館湯浅八郎記念館 新装版編集

民芸の心(新装和英版) 森本あんり

内田 樹著 レヴィナスの時間論 松丸和弘

鬼頭葉子著 動物という隣人 竹之内裕文

堀江洋文著 ハイソリヒ・ブリンガー 大石周平

住谷 眞著 烈しく攻める者がこれを奪うII 吉田 新

川中子義勝著 ハーマンにおける言葉と身体 宮谷尚美

唯一無二の著作集  
好評発売中!



## アウグステイヌス著作集 第20巻II

詩編注解(6)

40年以上の歳月をかけて、『アウグステイヌス著作集』ついに完結! 詩編作者の声に聴きながら、絶えず主イエス・キリストの姿を描く本注解は、教会史上の傑作と呼ばれる。本書には1,031-1,500編を収録。

●A5判・上製函入・964頁・定価12,100円



## 霊操

イグナチオ・デ・ロヨラ著  
川中 仁訳解説

イエズス会の創設者聖イグナチオが、自身の霊的体験にもとづいて祈りの方法をまとめた、霊的修行プログラムの指導書。聖人の霊性と神学の精髓が表現された古典的著作であり、時代を超えて多数の信徒の信仰実践に供されてきた教会共通の遺産が、自筆稿からの最新の翻訳でいま蘇る。

●四六判・並製・170頁・定価1,100円

## 凜として生きる

キリスト教教育に魅せられて

平塚敬一著

戦火、権力の暴走、自然災害、コロナ禍、愛妻との別離——心痛に満ちた日々の中で綴られた、平和と人間の尊厳を訴える時事・聖書エッセイ集と講演録。長年にわたりキリスト教主義学校の教育現場をリードしてきた著者が未来に遺すメッセージ。

●四六判・並製・342頁・定価1,760円

## 日本正教史

幕末から現代まで

及川 信、伊藤慶郎、ハリン・イリヤ、小野貞治著  
及川 信 監修

待望の正教布教の通史、ついに刊行

1861年に宣教師ニコライが函館に渡来して始まった日本正教会。20世紀の幾多の苦難を乗り越え、正教会の正統な教理と伝統を守り、伝えてきた160年あまりの歴史を、最新の一次資料をもとに描いた画期的労作。

●A5判・上製・442頁・定価5,500円



好評発売中!

## 宣教師ニコライの全日記 全9巻

中村健之介 監修



東京・神田駿河台の「ニコライ堂」にその名をとどめるロシア正教会宣教師ニコライ・カサートキン(1836-1912)の40年にわたる滞日日記の全訳。第43回日本翻訳出版文化賞・第23回祥会出版文化特別賞受賞!

●B5判・上製・各巻平均380頁・全巻揃価104,500円(分売不可)





## 物語の力

田中 光

壮大な物語の世界の虜になった。

しかし、単に壮大なスケールの物語だけを好んで読むようになったかと言われればそうでもない。トールキンとは全く違う設定で物語を記しているマリリン・ロビンソンの作品に出会ってから、彼女の作品も大好きになった。アイオワ州の架空の田舎町ギレアドを舞台にした「ギレアド三部作」(『ギレアド』のみ邦訳あり)は、牧師やその家庭のことがテーマになっていることもあって、繰り返し興味深く読んでいる。

スケールの大小にかかわらず、「本物」の物語には共通して、私たちを真実で気高いこと(フィリ4・8)へと方向づけ、私たちの生き方を変える力がある。そしてそうした物語を「本物」にしている重要な要素。それは、作者たち自身を生かしている神の救済の物語そのものであると言えるのかもしれない。

(たなか・ひかる 東京神学大学准教授)

とりたてて「文学青年」だったわけでもなかった私が、三代を過ぎてから物語を少しずつ読むようになったきっかけの一つは、カナダへの留学であった。留学中、主日礼拝の説教の中で、トールキンやルイスといった、いわゆる「インクリングズ」のメンバーの作品がイラストレーションとして用いられる場面に度々接した。殆ど彼らの作品を読んだことがなかった私は、説教者たちがそうした作品を引用する意図を知りたいと思い、彼らの作品を読み始めた。ルイスの『ナルニア国物語』から始まって、トールキンの『指輪物語』も読んだ。そうして彼らが紡ぎだした物語に、次第に引き込まれていったのである。帰国後も物語への憧れはなくなり、むしろ日々強められていった。特にトールキンの『シルマリルの物語』には圧倒された。彼は物語の世界を創出するためにエルフや人間、ドワーフの言語を一から作り上げた上で、天地創造から始まり終末までを見据えた「中つ国」の栄枯盛衰の物語を描き出す。私はこの

## ▼シリーズ この三冊！

# 〈キリスト教と哲学〉の関係を問い直す三冊 ―ミシェル・アンリを読み継ぐ

阿部善彦

(あべ・よしひこ) 立教大学文学部キリスト教学科教授

について断罪する「ヨハネス二二世の  
教皇勅書」(『エックハルトI』キリス  
ト教神秘主義著作集6、教文館、19  
89年に収録)が発せられた。

断罪と排斥によって思想史の表舞台  
から退場したエックハルトは、近現代  
になって「ドイツ神秘主義: Die  
deutsche Mystik」という言葉とともに  
西洋哲学の歴史の中に再発見・再評  
価された。「ドイツ神秘主義」はエッ  
クハルトからヤーコプ・ベーム(15  
75―1624)に至る思想潮流とみ  
なされ、ドイツ観念論という頂点に向  
かう西洋哲学の発展史的線上に描き出  
された。日本におけるエックハルト研  
究の主要な先駆者のひとり西谷啓治  
(1900―1990)もまたそれに  
したがってエックハルトとベームを同  
じ神秘主義の類型に並べている。その  
際、西谷のエックハルト論が「神性の  
無」にもとづいて「絶対無」を強調し、

(1) 『ミシェル・アンリ読本』(川瀬  
雅也・米虫正巳・村松正隆・伊原木大  
祐、法政大学出版局、2022年)

色々と学ぶところがあつた。ここで皆  
様と問題意識を共有できればと幸いで  
ある。日頃わたしが論文・発表に取り  
上げるのは主にマイスター・エックハ  
ルト(1260頃―1328)とその  
周辺である。エックハルトはトマス・  
アキナス(1225頃―1274)

(3) 『キリストの言葉』(武藤剛史訳、  
白水社、2012年)

と同じドミニコ会の神学者で、同会の  
教育・会務の数々の要職を務め、パリ  
大学神学部教授にも二度任命された。

〈キリスト教と哲学〉などという手  
垢まみれのテーマで今さら何を新たに  
問い直すのかとも思われよう。しかし  
本稿の依頼をいただいて考えてみると

だが晩年には異端嫌疑がかけられ、諸  
命題が吟味され、最終的に二八の命題

さらに、それをベームの「無底」につ  
なげて論じていることはよく知られて  
いる。かくしてエックハルトは「三位  
一体の神」を否定して「神性の無」へ  
の突破と内在を説いた、非キリスト教  
的な「絶対無」の〈神秘主義者〉(哲  
学者)と評され、なおかつ、そうした  
エックハルト像はまだまだ広く流布して  
いる。

の思考を了解することである」(上4  
56頁)と述べ、西洋哲学がエックハ  
ルトを理解したことがなく、エックハ  
ルトは西洋哲学における「例外的な思  
想家」であつて、エックハルトから  
ベームさらにドイツ観念論へと一体的  
に論じうる「ドイツ神秘主義」の思想  
的連続性は成立しないと看破した。

しかし、このようなエックハルト像  
は妥当か。そもそも、いまだかつて西  
洋哲学がエックハルトを理解したこと  
はあつたのか。この問いを西洋哲学に  
対する根本的批判としてきわめて鋭く  
突きつけたのがミシェル・アンリ(1  
922―2002)である。アンリは  
最初の名著「現出の本質」(上下・北  
村晋・阿部文彦訳、法政大学出版局、  
2005年)で「エックハルトを断罪  
した者たちには、欠けていたものがひ  
とつだけある。それは、エックハルト

アンリによれば、ベームの「無底  
[Ungrund]」(フイヒテ、シェリング、  
ハイデガーに影響を及ぼしている)は、  
それ以上いかなる根底にも根拠にもさ  
かのほりえない根底無き根底、根拠無  
き根拠であるが、結局、それは、エッ  
クハルトが「根底[Grund]」として説く  
ところを理解せずに、説明・理解不可  
能で不可知なるものを実体化したに過  
ぎない。この点は『ミシェル・アンリ  
読本』(川瀬雅也・米虫正巳・村松正  
隆・伊原木大祐、法政大学出版局、2  
022年)の第二部第一章「アンリと

ドイツ神秘主義」で私自身で扱ったの  
で読んでいただきたい。前置きが長く  
なつたがこの『ミシェル・アンリ読  
本』が紹介したい一冊目である。  
それでは西洋哲学が理解しえなかつ  
たエックハルトの「根底[Grund]」とは  
何か。それは「無底」のように語りえ  
ないものとして不可知の闇の中に祭り  
上げられるものでは断じてない。アン  
リの比類なき慧眼が鋭く捉えたように  
「根底」は神的生命の「誕生」のはた  
らきそのものである。すなわち、アン  
リがエックハルトからの引用として示  
しているように、永遠の父なる神は  
「生み出すこと」によって自分自身の内  
にとどまり、自分自身にとどまること  
によって生み出す」(現出の本質、上  
462頁)。つまり「根底」とは父な  
いし神性が神秘的に秘匿される(場)  
などではなく、父が父自身のうちにと  
どまるはたらきそのものであり、しか

も、自ら自身にとどまることの中に子を生む「誕生」と一体である。この「一体性」こそがエックハルトの説く「神性」の本質である(同461頁)。「父」が生む「子」を、ロゴス(パロール・ことば)として聖書が示しているのは、この一体性ゆえに子に父の一切が与えられ、子において父が知られるからであり、「根底」は生み・生まれる神のいのちの自己啓示そのものである(同475頁)。かくしてエックハルトの説く「根底」は「誕生」という神的生命の自己啓示であって、断じて、語りえないものとして不可知の闇の中に祭り上げられるべきものではなかったのである。

アンリの驚くべき点は1963年に発表した『現出の本質』におけるエックハルト理解を、晩年の著作、2000年発表の『受肉』(中敬夫訳、法政大学出版局、2007年)、2002

年発表の『キリストの言葉』(武藤剛史訳、白水社、2012年)で一層徹底的に深めたことである。そこで「キリスト教と哲学」というテーマがさらに問い直される。以下に簡潔に述べたい。

そもそもエックハルト自身が明確に述べているが「誕生」の理解は聖書・教父的源泉に遡る。この聖書・教父的源泉の存在は、教皇庁での審問で無視されただけでなく、その後、「三位一体の神」を否定した非キリスト教的な「神秘主義者」(哲学者)というエックハルト像を作り上げた近現代以降のほとんどのエックハルト研究でも無視されてきた。しかし、エックハルトが受け継いだ「誕生」の教説は、それこそ教父たちが正統教義の確立をめぐる熾烈な論争を通じて証したキリスト論、三位一体論の核心として磨き上げられたものであって、その教父たちの命懸

けの真理の証しに對抗・挑戦し続けたのは、たんなる人間的理性の限界内にキリスト教の生み・生まれるいのちの真理を貶めようとする西洋哲学であった。アンリの『受肉』は、キリスト教とその成立当初から激しく反発したこの世の知恵たる哲学との根源的対立の最前線において、教父たちが生み・生まれるいのちの教えをいかに証しし、語り継いだかを鮮やかに描く。

『現出の本質』においてエックハルトが「例外的思想家」と評されたが、そもそも、それは西洋哲学が自らの思惟にとつて異質で理解できないものとして拒否・排斥してきた、生み・生まれる「誕生」というキリスト教の真理を、エックハルトが教父たちとともに語り継いできたからである。このことが『受肉』を通じて一層はつきり示される。しかし、この「誕生」の真理性は、生む父から生まれる子として、自

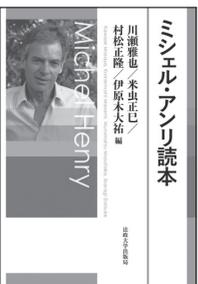
ら自身によってそのいのちの真理を証したキリスト自身とそのキリストの言葉の真理性に根拠づけられる。この究極の真理問題を、アンリの最後の著作『キリストの言葉』は、聖書に記されたキリストの言葉を通じて究明し、さらに、キリストが何者であるのか、その言葉の意味するところは何である

のかを、西洋哲学が決して理解することができなかったことを示す。なぜならキリストを知る者、神の言葉を聴く者は、いのちの言葉によっていのちに生かされる者、神のいのちに生まれる者にほかならないからである。「言の内に命があった」にもかかわらず、この「いのち」の言葉、「いのち」の

自己啓示」を人間はなぜ自ら拒絶してきたのか(同139頁)。本書におけるアンリの問いかけは『現出の本質』以来のこの世の知恵たる西洋哲学に対する最終的・決定的批判を超えて、「いのちの真理」を憎悪し、敵意を抱くわれわれ人間の根源悪にも向けられている(同153頁)。

### 『ミシェル・アンリ読本』

川瀬雅也、米虫正巳、村松正隆、  
伊原木大祐：編  
法政大学出版局  
2022年刊  
A5判 350頁  
3,410円



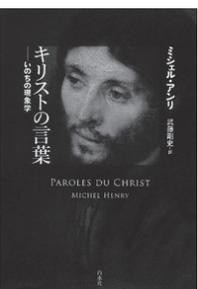
### 『受肉』

ミシェル・アンリ：著  
中敬夫：訳  
法政大学出版局  
2007年刊  
四六判 552頁  
6,600円



### 『キリストの言葉』

ミシェル・アンリ：著  
武藤剛史：訳  
白水社  
2012年刊  
四六判 250頁  
3,520円



# イエスに従う生き方へと招く 親しみやすい講解

〈評者〉**本多峰子**



N・T・ライト新約聖書講解2  
すべての人のための  
**マタイ福音書2**  
16-28章  
N・T・ライト著  
井出 新訳



世界の最新聖書学を牽引する学者のひとりであり、英国教会の司教でもあるN・T・ライトの新約聖書講解マタイ福音書の後半がついに、井出新氏の素晴らしい訳で出版されました。この講解書は、学術的にも高い基準で書かれ、専門の研究者にとっても新たに多くの知識と気づきを与えてくれるものでありながら、「すべての人のための」という題が示すように、一般の教会員や、キリスト教の外部にいる読者にもわかりやすく書かれています。

それぞれの単元は、まず聖書の訳、続いて私たちが身近に経験するような日常的なエピソードが語られ、一世紀の時代背景や聖書の語句の丁寧な説明を交えたテキスト解釈が続く、そのテキストの意味が私たちの生き方についてのようにかかわるか、読者に考えさせる展開で結ばれる構成になっています。

ことに特筆すべきは、この本の、わくわくするような魅力的な筆致です。一世紀に弟子たちに教えたイエスが、生きて今、私たちに語りかけているのを聞いているような、知的にも感情的にも鼓舞される、深く動かされる刺激を、この本は与えてくれるのです。

イエスは出会った人のすべてに、今までの自分の生き方を振り返り、神に立ち帰り、新たな生き方に踏み出すことを求めました。イエスの福音は「すべての人のための」福音だったのです。そのような意味では、ライトのこの本は、「すべての人のためのマタイ福音書」の講解、であると言えます。ライトは前書きで、「マタイ福音書が描くイエスは豊かで多面的です。イスラエルのメシア、この世を治め、救う王、モーセよりもなお偉大な教師、もちろん、われわれすべてのために自分の命を与える人の子としても描か

ます。マタイはこうしたイメージを一つ一つ並べていき、われわれが福音書のメッセージから知恵を学び、新しい生活スタイルを身に付けるようにと招きます」（八頁）と書いています。実際、イエスに出会った人は、それ以前と同じではられません。イエスは人々に教え、問いかけました。ライトは、イエスの問いかけが私たちの現在の世界で、私たち自身にいかに関与しているかを実感させます。たとえば、道で物乞いをしている人たち、ホームレスの人たちに、私たちが目をつぶって通り過ぎ、よけて歩きたいと思うような時には、「もしあなたの目があなたをつまづかせるなら、それをえぐり出して捨てなさい。両目揃ったまま地獄に投げ込まれるより片目だけで命に入る方がよい」というイエスの教えを思い出すように、ライト

は書いています。「最初にイエスが提起した容赦のない問いかけを、今日、これらすべての小さな者たちが、同じように私たちに突きつけているのです」（六三頁）と。今もイエスは働いており、命を与えるイエスの愛の支配下に世界を移している、そしてそれは、「イエスに従う私たちを通して、という驚くべき方法」（三〇三頁）によってなのだと言います。この講解書は、聖書に何が書かれているか、だけではなく、聖書が私たちに何を問いかけて、何を求めているかを伝え、私たちに新しい生き方を誘ってくれます。マタイ福音書が最初の読者たちに語りかけたように。

（ほんだ・みねこ）八王子栄光教会牧師、二松學舎大学教授  
（四六判・三二八頁・定価三〇八〇円・教文館）

## わたしが「カルト」に？

誰かがカルト化する可能性とは？

齋藤 篤  
竹迫之  
川島堅二 監修



カルト脱会者で、カルト被害者支援に携わる牧師2名が、カルト問題の現状、カルトの基礎知識、被害防止の対策などを丁寧に指南する。  
四六判・136頁・定価16500円

本書を推薦  
します



鈴木エイト  
(ジャーナリスト・作家)

## I 遠藤周作 その人生と 『沈黙』の真実

山根道公



『沈黙』執筆に至る経緯、各登場人物の魂のドラマを読み解き、『沈黙』という作品の真実に迫る。生誕百年を記念して改訂復刊。  
A5判・400頁・定価4840円

日本キリスト教団出版局  
〒169-0051 東京都新宿区西早稲田2-3-18  
☎03-3204-0422 ☎03-3204-0457  
E-mail eigyou@bp.uccj.or.jp (価格10%税込)  
<https://bp-uccj.jp>

真意を読み出す  
熱意とスリル

〈評者〉並木浩一



コヘレトと黙示思想  
小友 聡著



コヘレト書が人々に与える印象は厭世的な世界観の展開であるが、この書物は見かけと違い、実は同時代に出現した「黙示思想」批判の書である。黙示を重視するダニエルのような賢者は、神が歴史に終末をもたらす「将来起こること」の「秘密」を言葉の解釈によって認識し、それを誇りとする。しかし人々が終末の予知に没頭すれば、現世に対して消極的となり、人間の自由と責任とを放棄して民族の連帯を危うくする。実際、その頃にエッセネ派はエルサレムの祭儀団体を離れ、死海のほとりで閉鎖集団を形成した。

ダニエル書は一般的にシリア王による神殿の汚辱を拭った後の前一六四年頃に成立したと見なされている。他方、著者によれば、コヘレト書はシリアによるギリシア文化の押しつけがもたらした混乱が収まっていない前一五〇年頃

でも、個々の問題についても、詳しい考察を省いている。それに対し本書に収録された諸論文は、ダニエル書とコヘレト書が前二世紀中頃のユダヤ教の混乱期にいかなる役割を果たしているかを熟慮する。著者は作者が現実主義の徹底のために「最悪のシナリオを想定」する作戦を取ったと考え、その観点から個々のテクストについて立ち入った考察を展開する。自説を確立しようとする著者の議論には気が溢れており、注解書における著者の発言を納得させる。著者のコヘレト書理解は学位論文の執筆時に一気に獲得されたわけではなく、その後にも論拠発見のステップがあった。著者は信濃町教会での講演の際、反黙示の意図と「へべル」（新共同訳「空しさ」、聖書協会共同訳「空」との関わりを問われてそれを有効に説明できなかった。しか

に成立した書物であり、黙示重視のダニエル書を批判する著者のこの大胆な推測は一九九〇年代の後半のドイツ留学の所産としての博士論文として結実した。しかしこの革新的な見方はダニエル書を旧約文書の最終のものに見なす通説を訂正することになり、コヘレト書をダニエル書批判と関係づける研究者も存在しないので、学会では顧みられなかった。そこで著者はコヘレトの黙示批判についての一層の証拠づけを求めて、二〇〇〇年から二〇一七年にかけて一四編もの論文を執筆した。本書は自説補強のためのこれらの研究論文を収め、巻末には的を射た書評二編を添えている。

著者はこの間の洞察に基づいて、『コヘレト書』を二〇二〇年に出版したが、注解書であるゆえに簡潔な叙述心がけており、「黙示とは何か」などの総論的な問題につい

しその後、作者は黙示が終末の時に関心を集中させることに対抗し、現在の時の貴重さを際立たせるために、人間活動のすべては「束の間」だと言ったと気づいた。書物冒頭でのこの言葉の多用は読者に悲観的だとの印象を与えるが、作者は誤読される危険を恐れていない。作者の意図は人を惑わす文言をちりばめて、その「謎解き」を読者に迫ることにある。例えば、千人の中に男はいるが女は一人もいないという女性蔑視と見える言葉（七・二八）は、男はいざというときには軍隊の一員として戦うのだと解すべき謎掛けである。見かけに捕らわれてはコヘレト書の挑戦に立ち向かえない。本書は読者に真意を読み出すスリルを味わわせる労作である。

（なみき・こういち 国際基督教大学名誉教授  
A5判・三二〇頁・定価五五〇〇円・教文館）

〈スコットランド 信仰告白〉による  
信仰入門

歴史・本文・講解  
原田浩司  
HARADA Koji

宗教改革の精神を  
次世代に繋ぐために！

息の長い歴史的な要  
点から聖霊と改革者の熱い  
信仰告白から教理の要  
点を学ぶ。

A5判  
定価 1,760 [本体 1,600 + 税] 円  
ISBN978-4-86325-133-5

株式会社 一麦出版社  
札幌市南区北ノ沢3丁目4-10  
TEL (011) 578-5888  
<https://www.ichibaku.co.jp>  
携帯 mobile.ichibaku.co.jp

### 雅歌を信仰生活と結びつける

〈評者〉小友 聡



### 雅歌の説教

住谷 翠著



「雅歌」の説教集出版！これを聞けば、きっと驚きの声が上がるといえる。雅歌は、現在の教会ではほとんど説教されない書です。この雅歌という書の全体を丁寧に、四六回にわたって説教した説教集が本書です。著者は日本キリスト教会小平教会牧師の住谷翠先生。雅歌と言えば、古代教父オリゲネスの雅歌講話が思い出されますが、住谷先生は現代のオリゲネスの如く、みずみずしい言葉で雅歌を解き明かしています。快拳と言わなければならない理由があります。それは、雅歌は旧約聖書正典に含まれているにもかかわらず、内容は男女の恋愛詩であり、しかも神の名が一度も出てこない書だからです。どう見てもイスラエル固有の宗教文書ではなく、周辺の古代オリエント世界、特にエジプトの恋愛詩歌に起源があるのではないか。多くの聖

書学者はそう推測し、雅歌は宗教性を欠いた世俗的な恋愛歌集として字義的にのみ解説されるのです。しかしこの書は、かつては聖なる文書、キリストと教会の関係を物語る書として伝統的に解釈されました。残念ながら、その解釈は教会の恣意的な解釈とみなされ、もはや時代遅れになり、雅歌は聖性を失いました。

現代において雅歌は教会の講壇で語られることはなく、雅歌で説教をしたことがないという牧師がほとんどでしょう。けれども、雅歌も聖書正典に含まれるのです。住谷先生はあえて教会のタブーに挑みました。見事な挑戦です。教会で雅歌を語り、雅歌で説教することが現代において可能だというお手本を示してくれました。

明するのです。その上で、雅歌を靈的に「信仰の歌」として解釈します。靈的というのは、キリストと教会という関係において、あるいは雅歌の言葉が響き合う旧約聖書や新約聖書の言葉に引き寄せて、説明するということです。聞き手は教会の会衆ですから、信仰生活に寄せた解き明かしが随所に見られます。この二段階の解釈による読み解きはとても自然で、違和感がありません。住谷先生の感性もあふれ出て、味わい深く雅歌の御言葉を聞くことができます。たとえば、七章一二節に「マハナイム」の舞いを踊るシユラムのおとめの詩があり、おとめの「ふっくらしたのも」が称えられます。住谷先生は、第一段階で「恋の歌」として、この踊りが優雅であって、しかも、その踊りには激しさがあると説明します。第二段階では「信仰の歌」と

して、このテキストが創世記三三章三節のマハナイム（二組の陣営）に引き寄せて読み解かれます。さらにヤコブが神と格闘し、「腿」の関節をはずされた姿に雅歌が重ねられます。ここに「信仰者の腿」という実にイメージ豊かな主題が浮かび上がるのです。神との格闘は神と踊る信仰者の信仰生活。そこにこそ幸いがあると住谷先生は結論します。見事な解き明かしです。雅歌がこんな風に私たちの信仰生活と結びつき、雅歌の言葉が私たちの心に響いてきます。信徒の皆さんのみならず、牧師の皆さんにも是非お読みいただきたい説教集です。

（おとも・さとし 東京神学大学教授、中村町教会牧師）  
（A5判・二二八頁・定価二二〇〇円・キリスト新聞社）

現代社会における「ことばの力」の回復を目指して

# ことばの力

キリスト教史・神学・スピリチュアリテイ

関西学院大学キリスト教と文化研究センター【編】



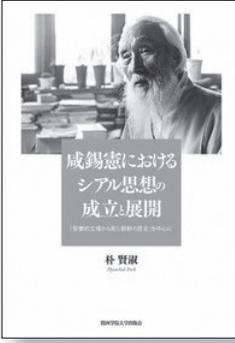
キリスト教において、「神のことば」「神に関わることば」はどのように理解され、どのような文脈でどう語られたのか。礼拝、文書、コミュニケーションにおいて、どのような役割を果たしてきたのか。7人の研究者が現代におけるキリスト教と「ことばをめぐる諸問題」に、歴史、組織・実践神学、スピリチュアリテイの視点から立ち向かう。

四六判・並製・166頁、定価1,760円(税込)

キリスト新聞社 since 1946  
169-0051 東京都新宿区新小川町9-1 4F  
03-5579-2432 support@kirishin.com

「韓国のガンジー」が  
問いかける民衆思想

〈評者〉 山本俊正



ハムソクホン  
成錫憲におけるシアル  
思想の成立と展開  
朴賢淑著



『未完 朝鮮キリスト教史』を書いた澤正彦は、朝鮮の歴史が聖書に描かれているイスラエルの歴史に類似していることを指摘している（16頁）。確かに列強国に挟まれた

両国の歴史は、侵略と分裂を繰り返す苦難の歴史であった。朝鮮半島の苦難の歴史の極めて大きな部分は、日本との関係であることに気づかされる。14世紀を中心に活動した海賊集団倭寇は略奪を繰り返し高麗を苦しめた。16世紀末には、豊臣秀吉によって2度にわたる朝鮮侵攻が行われる。秀吉の死後撤兵するが、長期の戦乱は朝鮮全土を荒廃させた（文禄・慶長の役）。日本は、19世紀後半に起きた江華島事件を契機に武力を背景とした不平等条約（江華条約）を結び、日清・日露戦争を経て、1910年に「韓国併合条約」で大韓帝国の植民地化を完成させる。36年間に及ぶ植民地支配は、日本の敗戦（朝鮮半島から見れば解放）と

ともに終結する。しかし戦後、南北は分断され、78年後の今も植民地支配の清算は済んでいない。

本書は、成錫憲（ハム・ソクホン）のシアル（民衆）思想がどのように醸成され、展開されたかを様々な角度から解明し、その全体像に迫る力作である。成錫憲が日本の植民地時代に朝鮮の苦難の歴史を叙述した『聖書的立場から見た朝鮮の歴史』を中心的な1次資料として書かれている。第1章では成錫憲の3・1独立運動、日本留学期の体験、内村鑑三との出会いと思想的影響について記述されている。第2章の「朝鮮の無教会」としての活動期では、朝鮮に戻り、民族教育を中心に展開された多彩な活動、柳永模からのシアル思想への影響、矢内原忠雄との交流に触れている。さらに第3章では、『聖書朝鮮』誌に掲載された成錫憲の論文を前期、中期、後期に分類し、内容の分析と紹介が行

われている。特に、連載論文『聖書的立場から見た朝鮮の歴史』については検閲削除された部分を含め、精緻な分析と解説がなされている。第4章ではシアル思想の核心とされる「預言者」像について考察されている。内村鑑三を預言者のモデルとして捉えていたこと、成錫憲が書いた詩文「預言者」を基に、「素の人」から「民衆」への展開が紹介されている。第5章では、成錫憲がシアル思想の土台の1つとなる「苦難」を、イザヤ書の「苦難の僕」に合わせて「受難の女王」（歴史の道端に座っている年老いた娼婦）をモチーフとして論じていたことを解説している。

本書の副題ともなっている『聖書的立場から見た朝鮮の歴史』は、戦後も朝鮮の歴史と聖書とを結びつけた史観として民衆神学にも影響を与え、再評価されている。その最大

の理由は、成錫憲が王や支配者の立場からではなく、民衆（シアル）の苦難史に寄り添い、こだわり続けたことにならぬ。成錫憲は、日本の植民地支配下においても戦後の韓国軍事政権下においても、一貫して反体制運動を実践し、非暴力主義を唱えた。本書は「韓国のガンジー」と呼ばれた成錫憲の「シアル思想」の建付け、高さ、深さ、広がり、と奥行について学ぶことのできる類書に乏しい良書である。一読を薦めたい。

（やまもと・としまさ）元関西学院大学教授  
（A5判・三〇八頁・定価五五〇〇円・関西学院大学出版会）

新型コロナのパンデミックによって  
見いだされた、教会の新たな境地

日本クリスチャン・アカデミー共同研究

コロナ後の  
教会の可能性

危機下で問い直す  
教会・礼拝・宣教

荒瀬牧彦 [編]  
浦上 充 渡邊さゆり  
仲程愛美 越川弘英  
吉岡恵生 中道基夫  
片岡義博 [著]



コロナ禍で教会に突きつけられた神学的な課題とは何か。それを検証しつつ、パンデミック収束後の諸教会に向けて、「今までのようにはいかない」現実を見据えて、新たな可能性の具体案を提示する。日本クリスチャン・アカデミーとキリスト新聞社による共同大規模アンケートの結果も収録。

A5判・並製・138頁、定価1,650円(税込)

キリスト新聞社 since 1946  
169-0051 東京都新宿区新小川町9-1 4F  
03-5579-2432 support@kirishin.com

# 繊細かつ劇的で虹色の光を 放つ水滴のような言葉

〈評者〉久松英二



イースター小品集

わたしが  
十字架になります

及川 信著



本書は、イエスの死と復活にまつわる福音書の記述に關わりのある人物やモノを素材として、著者が豊富な聖書知識をイマジネーションと斬新な発想でアレンジし、8編のショートストーリーに紡ぎあげた珠玉の作品である。

たとえば、第1話「赤いゆり」は、純白のゆりが少しずつ赤みを帯びて、最後には深紅に染まるプロセスを、受胎告知、カナの婚宴、ラザロの復活、磔刑後のイエスを乗せた荷車の移動という時間経過の中で描出している。もちろん、福音書にはそのいずれの場面にもゆりは登場しないが、著者は明らかに受胎告知の図像で定番の大天使ガブリエルが手にしている白ゆりから着想を得たと思われる。純潔を連想させる純白のゆりを天使からもらったマリアは、やがてぶどう酒の奇跡で盛り上がるカナの婚宴の喜びを象徴する「ワインレッドのような赤色」のゆり、ラザロに吹き込

を天使が残りの草木たちに募ったところ、役割を終えた後、火に焼かれ灰となる、と告げられたことに恐れをなし、草木たちはいろいろな言い訳をして回避しようとする。そんな中、普段は炭焼き用の木として用いられる「うばめがし」が、その役を買って出る。「私が十字架になります」とはこのうばめがしの言葉だ。ところが、この言葉を聞いた天使が突然豹変し、言い訳した草木たちを「炎の剣」で焼き滅ぼそうとする。すると、うばめがしが「神よ、かれらはなにをしているのかわからなかったのです。どうか、おゆるしてください」と、十字架上のイエスと同じ言葉で懇願し、天使は剣を鞘におさめる。イエスの死と復活を共に経験したうばめがしは、いまやエデンにおいて「善悪を知る木」および「生命の木」と並んで、「十字架の木」とし

まれた新たな命を謳歌する「みかん色、うす紅色、桃色」のゆり、そして最後に十字架で流した我が子の血を象徴する「真紅」のゆりに出会う。ゆりの色の変化がマリアの心の動きと連動していく様は、繊細かつ劇的である。

アレゴリカルなストーリーとしては、本書のタイトルにもなっている「私が十字架になります」が印象的である。イエスの受難が始まる頃、エデンの園に降り立った天使が、そこに集った草木に対しイエスが受難に要する道具となるよう指示する。すなわち、いばらの冠には「パウルス」というとげのある木が、イエスの遺体に塗られるはずの香油にはオリーブ、バラ、乳香の木が、イエスが纏う一枚の亜麻織物には亜麻が、聖体礼儀によって実現される「救いのはじまり」の杯となるぶどう酒には、ぶどうの木が指名される。しかし、最後に「十字架の木」となるべき者

て植えられ、記憶される存在となった。

このストーリーには数々の聖書の寓意が発見される。聖書に親しんでいる人ほどそれは理解される。8編全部がそのように象徴と寓意の宝箱のような濃密な内容となっているが、聖書の知識がなくとも、それなりの理解の仕方である者の心に深い感銘を与える作品となっている。特筆すべきは、8編のいずれも虹色の光を放つ水滴のような言葉が散りばめられた美しさと哀しさと優しさに満ちた物語となっている点である。著者は正教司祭であるが、宗派の違いを超えた普遍的心性に根差す作品であること、またアイコン画家の白石孝子氏の挿絵と詩人でエッセイストの山崎佳代子氏のあとがきも秀逸であることを申し添えておく。

(ひさまつ・えいじ) 龍谷大学国際学部国際文化学科学科教授  
(四六判・二一六頁・定価一五四〇円・ヨベル)

**ヨベルの新刊案内**

日本同盟基督教団  
横浜白山道教会伝道師  
松下景子  
ご予約好調！

**語りいと祈り**  
信仰の12ステップに取り組んだ人々の物語  
人は語りいながら、告白しいながら、深刻で重い問題自体は変わらないものの、そこから解放されていく。藤掛明氏自分の弱さと強さを霊的同伴者と共に見つめ成長させて頂くことができる、イエスの約束されている「豊かないのち」を追い求める人々の、魂の記録。 四六判・二七六頁・一六五〇円

**岩本遠億 ルカの福音書説教集1**  
神はあなたの真の願いに答える  
7月20日刊行予定  
「目から鱗」を超える感動！  
イエスの時代に連れて行かれる感じ！  
すべてのいのちの源である神、私たちが友と呼んでくださった神の子イエスへの想念―キリストの平和教会で語られている「ルカの福音書」説教第一弾！  
新書判・二一六頁・一三二〇円

ヨベル YOBEL Inc. info@yobel.co.jp  
〒113-0033 東京都文京区本郷 4-1-1-5F  
TEL03(3818)4851 FAX03(3818)4858  
出版の手引き / 呈 (税込)

## 現代の視点、アジアの声

〈評者〉江口再起



アジアの視点で読む  
ルターの小教理問答

J・P・ラジャシェカー編著  
宮本 新訳



今、教会が苦戦している。キリスト教はこのままでいいのか。原因はいろいろある。その一つは、キリスト教の偉大な、それゆえ重すぎる遺産をどう生きるか、という問い。アウグステイヌス、トマス、ルターやカルヴァン、そして近々のことではバルトがいる。それらはもう古いと、横を通り過ぎることも一つの手法だ。しかし、そうした信仰の先達の残した遺産を、今日の教会の実存をかけて、生き直してみることも大切ではなからうか。

たとえばルターの『小教理問答』という小さな本。ルターが一五二九年に書いた信仰教育の本。今日でもルター派の教会では、受洗者の準備教育で使われている。内容は十戒、使徒信条、主の祈り、そして洗礼と聖餐についての簡潔な問答形式の入門書。

しかし素直に言って、そのまま読んでもピンとこない。

ルター派神学者が集まり『小教理問答』を読むためのテキストをつくった。これが本書『アジアの視点で読むルターの小教理問答』である。インド、香港、タイ、インドネシア、日本と、国籍も教会の背景もそれぞれ。協議を繰り返して解説書をつくった。そこには、現代の視点、アジアの声が響いている。その結果、本書は今まで我々が意識的・無意識的に考えることを怠ってきた様々な教えが問い直されている。とてもラジカルに、だ。たとえば先の第一戒の偶像禁止、他宗教の問題をめぐって、本書の解説はこうだ。少し抜粋してみよう。「近世以降の西洋からの宣教には：無理解から他宗教とその伝統の真理性を認めず、多神教的であることを忌み嫌い、その反面、自らの優位性を正当化してきた歴史がある」。しかし「ルター」の強調点は、唯一

ルターの時代にはそれでよかったのかもしれないが、あまりに簡潔。たとえば十戒の第一戒「あなたは他の神々をもつてはならない」については、こう書いてある。

問い これはなんですか。

答え 私たちはすべてのものにまさって神を畏れ、

愛し、信頼するのだよ。

これを初めて読んで、そのままから納得する人が今日いるだろうか。では、この偉大な小さな本を、今日、どう生かすか。そもそもなぜピンとこないのか。理由が二つある。五百年前の本である。つまり現代の視点がない。もう一つは、歴史的経緯から当然のことながら、西洋中心主義つまりアジアの視点が全く欠けている。これでは、十戒も使徒信条も主の祈りも、現代人の心に深く届かない。

と言うわけで、ラジャシェカー氏をリーダーにアジアの

神や多神教のこともなければ、無神論ですらなかった。なによりも私たち人間の信頼と心のよりどころが神に置かれるところにあった。「ルター」の解説によると、『他の神々』という表現は、マモン、権力や支配、教会の伝統や慣習など諸々を指している」等々。

すばらしい試みだ。こうした作業を通じて、我々は聖書が、そしてイエス・キリストが指し示し体現した「真理」に一步一步近づいていく。

訳は本書の執筆者の一人でもある宮本新氏。わかりやすく、ていねいな訳である。感謝したい。多くの方々に（ルター派以外の！）読んでいただきたい。硬直したルター主義でない、現代人ルターが、ここにいます。

（えぐち・さいきルター研究所所長

（四六判・二二四頁・定価一〇〇円・リットン）

**ヨベルの新刊案内**

**山口里子** **そして拓かれる未来の道へ**  
**マルコ福音書をジックリと読む**

AS判装・三三八頁・  
二七五〇円

福音書のマルコの思いと、その基にあるイエス自身の思い・行動を、学び考える。聖書を原語で読み、時代背景を学ぶ。古代エリート男性の父権制的な価値観が、福音書著者たちも浸み込みつつ抵抗もして編集した。現代の私たちはそれをどう読むか。この難問に、公開講座の仲間たちとともに学び、様々な人生経験と豊かな思いを分かち合う。

**大貫隆** **ナタ・ハマディ文書からヨナスまで**  
**グノーシス研究拾遺**

四六判上製・三三八頁・  
二七五〇円

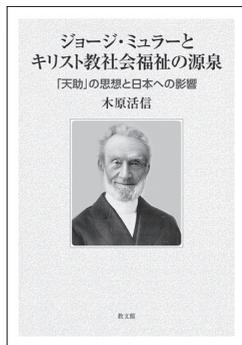
グノーシス研究拾遺

大貫氏のこの道に至る回顧とその成果は読者に共感を呼ぶ。グノーシス主義の研究は新約聖書研究にとって不可欠・不可分の関係にあるという信念から我が国のグノーシス研究を長く牽引してきた著者が、ナタ・ハマディ文書の全体像からヨナスの『グノーシスと古代末期の精神』までをつぶさに追跡し、その研究に散りばめられていた欠片を拾い集めた待望の書。

ヨベル YOBEL Inc. info@yobel.co.jp  
〒113-0033 東京都文京区本郷 4-1-1-5F  
TEL03(3818)4851 FAX03(3818)4858  
出版の手引き / 呈 (税込)

## 多くの孤児を救った「偉人」の 思想の原点と真の姿に迫る！

〈評者〉 山口陽一



ジョージ・ミュラーと  
キリスト教社会福祉の  
源泉  
「天助」の思想と日本への影響  
木原活信著



本書は、ジョージ・ミュラーの思想と事業について、歴史的検証と明快な論点で従来の一般的認識を格段に深めた研究である。一八九九年（邦訳一九六四年）のA・T・ピアソン『信仰に生き抜いた人』、一九二六年の金井為一郎『信仰の勝利者ジョージ・ミュラー』は今日まで版を重ねているが、木原はミュラーの「信仰と祈り」の生涯を再考し、偉人化されがちなミュラー像を新たに描き直す。

第一部は歴史的な検証である。一八〇五年にプロシアで生まれた不良少年は、ルター派の牧師をめざして入学したハレ大学で、学友ベータにより回心する。父の期待に反して宣教師を志願しイギリスへ渡った彼は、南部の港町ティンマスで生涯の盟友クレイク、伴侶となるメアリー・グロヴスと出会う。そこはブラザレン運動揺籃の地で、メアリーの兄アンソニー・グロヴスはブラザレンの祖であ

年間に及ぶ世界伝道旅行に旅立つ。

第二部ではミュラーの思想形成が新たな視点から解明される。彼は敬虔主義の祖フランケの死から百年後に彼の自叙伝からの感化で思想を形成した。ミュラーの孤児院の原型はフランケが創設したハレの孤児院にあった。ミュラーの思想はブラザレン運動の中で形成され、義兄グロヴスの「フェイェス・ミッション」こそ天助の思想の原点だった。さらに排他的なブラザレン主流派から排斥されたことで、ミュラーはオープンなブラザレンとして生きることにになり、これが孤児院への幅広い支援につながった。

第三部は日本への影響である。八十一歳のミュラーは、一八八六（明治十九）年十一月十九日に横浜に着き東京各所で講演、一月十日に上海に発つまで神戸、大阪、京都で

る。聖書を字義通りに信じ、イエスに頼る訓練を受けた彼は、南西部の都市ブリストルに移り、再洗礼を受け、牧師給を放棄してブラザレンの伝道者となった。ここに彼の「天助」による生涯が始まった。クレイクと共同牧会したベテスダ集会は、ミュラーが死去する頃には信徒が千二百名となる。一八三四年、国内外への福音宣教のために聖書知識協会（S K I）が設立され、S K Iによって三六年にミュラーの孤児院が設立された。後にハドソン・テラーもS K Iから中国に派遣されている。賛同者だけから献金を受け、借金せず、宣伝せずに神に祈る「天助」の思想による事業は財政難に陥るが、ミュラーは人の同情ではなく「神の栄光」を求めて祈る。孤児院は郊外のアシユリー・ダウンに移転して二千人を収容するまでになる。妻とクレイク亡き後、事業を後継に託し、七十歳のミュラーは十七

講演した。同志社での講演は、新島襄の序、津田仙の跋で『ジョージ・ミュラー氏小伝』なまひに 演説 信仰の生涯全』として津田の学農社から一八八九年四月に出版された。若き活版工だった山室軍平は、わずかに六銭の小冊子を買えずに筆写して百五十回も読み直し、同志社を経て救世軍の中将となり、晩年にはこの小冊子を復刻出版する程の影響を受けた。石井十次もこれを読みミュラーに心酔して岡山孤児院を始めるが、石井のミュラー評価は揺れた。

木原は、脆さと弱さを抱えて天助を求めるミュラーの愚直さに、偉人や奇跡の人ではないミュラーの本質を見て、これを自助、共助、公助を包むキリスト教社会福祉の源泉とする。

（やまぐち・よういち）東京基督教大学学長  
（A5判・三〇四頁・定価五〇六〇円・教文館）



## アジアの視点で読む ルターの小教理問答

J・P・ラジャシエカー 編著  
宮本 新訳

●四六判並製 定価一〇〇〇円

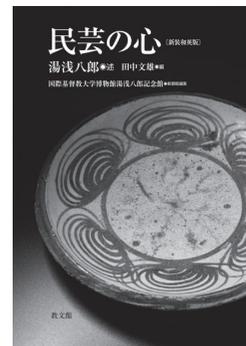
本書は、アジアを背景に持つ六名の神学者によって、ルターの小教理問答をアジアの視点で文脈的に読んだものである。アジアの現実、特に宗教多元主義、また教会が直面している幅広い社会問題（貧困、家長制、不平等、生態学的危機）を考慮しつつ、教理問答の意味と重要性を再認識するための試みでもある。

LITHON [リトン]

〒101-0061 千代田区神田三崎町2-9-5-402  
☎ 03-3238-7678 FAX 03-3238-7638

# 平和の追求者・湯浅が語る 民芸の魅力

〈評者〉森本あんり



民芸の心〔新装和英版〕  
湯浅八郎述  
田中文雄編  
国際基督教大学博物館湯浅八郎記念館新装版編集



本書の中核をなすのは、一九七八年の五月になされた集中講義の記録である。そのとき国際基督教大学（ICU）の四年生だったわたしは、三〇余名に限定された受講学生の中には含まれていない。二〇歳そこそこのわたしにとって、「民芸」という主題はあまりに地味で印象が薄かったのだろう。

それでも、湯浅先生の特徴ある声と話しぶりはよく覚えている。学内で講演会があると、先生は講演の意義を説明してゲストスピーカーを紹介し、講演が終われば聴衆からの質疑を取り仕切り、典雅な謝辞を述べて締めくくる。不思議なのは、日本語で話しても英語で話しても、相手が誰であろうと、そのゆったりとした格調ある口ぶりに何の変化も見当たらず、いつの間にか二つの言語を継ぎ目なく行き来していることだった。本書に出てくる「天下に一人

る。「民芸の心」は、そういう大きな歴史のうねりを背景としつつ、他人の意見や世間の評価に惑わされずに自分の考えを養うICUの一般教育として語り出されている。

心のうちに響く先生の警咳を聞きつつ本書を読み進めると、市井の人々が慎ましやかな暮らしの中で用に供する民芸品を作り、それらをいづくしんで大切に用いてきた姿に、筋の通った美の感覚が浮かび上がってくる。墨壺に印判物、刺子に屑織、馬の目皿に蕎麦猪口。それぞれに付された先生の体験談も味わい深い。なぜ高級な陶磁の世界に入らなかったのか。なぜ瓦収集をやめたのか。なぜ朝市で買った五十銭の風呂敷に千金の価値があるのか。民芸の魅力を語る先生の言葉は、長い尾を引く問いかけとなって読者の心に残る。

あって二人とない」「ICUに外人なし」「明日の大学」などの「湯浅節」は、学生や教職員が繰り返し耳にするICUの精神として、今も身体深くに染みこんでいる。

今回新たに付されたウイリアム・ステイール名誉教授の「解題」を読むと、湯浅総長の人生が戦後日本の平和と民主主義をそのまま体現したものであったことに気づかされる。湯浅先生は、生年こそ違えど昭和天皇と同じ誕生日で、しかも一九五二年の四月二九日はICUの献学式が挙行された日だった。その前日には、サンフランシスコ平和条約が発効している。大学図書館の前庭にある記念碑が宮妃殿下や理事長や総長と並んで園丁だった宮沢吉春氏の名前を刻んでいることは、地位や肩書きに囚われないICUの価値観をあらわす実例としてよく聞かされていたが、何とそれはこの日米平和条約の締結を記念した石碑だったのであ

実際の講演の折りには、京都のお宅から九〇〇点ほどの民芸品が運び込まれ、学生が手にとって見ることができるよう展示されたことである。それらをすべて収容し展示する施設が学内に完成したのは一九八二年、講演の四年後で、先生が亡くなられたほんの数ヶ月後だった。その三〇年後、わたしは湯浅八郎記念館の館長を務めることになる。先生のお話をもっとたくさん聞いてよければよかったと残念に思いつつ。せめて今日の学生たちと近隣市民の方々が、今後も同館に足を運び、あるいは多くのカラー図版と新たに全文の英訳が付された今回の復刊書を手にとつて、「民芸の心」に触れる機会をもっていただけばと願っている。

（もりもと・あんり）東京女子大学学長  
（四六判・二八八頁＋口絵一六頁・定価二二〇〇円・教文館）

## 神学ダイジェスト134号

急速な変化を遂げる現代社会。その中にある、多様な価値観に直面するキリスト者。本誌は海外の神学動向を紹介しながら、現代人のかかえる信仰への真摯な問いに光をあてる。

2023年6月発行  
A5版112頁  
定価640円（税込）

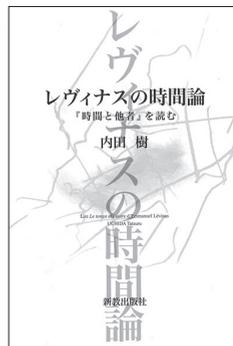
### 特集 神学的人間論の現在

- 巻頭言 「神学的人間論」未完の展望
- カトリック神学的人間論の提起 K・ラーナー
- 性、人種、文化―二十一世紀の神学的人間論 M・ドーク
- 神学的人間論の学際的課題 J・W・v・ハイスティーン
- 生物学に照らした神学的人間論の可能性 T・ダムズデイ
- シノダリティのための知恵 J・ロジャース
- 〈新連載〉典礼参加へと招かれて（二） M・サール
- 旧約聖書におけるトラー E・オットー
- 連載 私は思ったより大丈夫 ホン・ソンナム

上智大学神学会  
神学ダイジェスト編集委員会  
東京都練馬区上石神井4-32-11  
〒177-0044 Tel & Fax (03) 3594-4349  
E-mail shing-dt@netjoy.ne.jp

世界に類を見ない、  
テキストへの逐語的肉迫

〔評者〕松丸和弘



レヴィナスの時間論  
『時間と他者』を読む  
内田 樹著



良著の出現である。エマニュエル・レヴィナスは、二〇世紀最大の哲学者の一人であり、現代に刻まれた深い戦禍の経験から他者との関係性を問い続けた。彼の思想は、神の概念、倫理を巡って、無限や身代わり、他者への不可逆的な責務を説く。また、聖書やタルムードといったユダヤ教の伝統にも深く根ざし、こうした背景を理解することも彼の思想を読む上で重要である。

内田樹氏は、長く神戸女学院大学の教授を務めたが、多年、レヴィナスの思想に取り組んできた哲学者である。彼はレヴィナスの主要な著作の翻訳者であり、解説や論考も多数執筆している。本書は、内田氏が「レヴィナス三部作」と呼ぶ一連の著作の最終巻を成す。前二巻は『レヴィナスと愛の現象学』（二〇〇一年）、『他者と死者——ラカンによるレヴィナス』（二〇〇四年）であり、それぞれレ

ヴィナスの愛や死に関する思想を扱っている。本書では、レヴィナスの「時間」に関する思想が取り上げられる。本書の対象となるのは、レヴィナスが一九四六年から一九四七年にかけてフランス、パリの哲学大学院で行った四回の連続講義『時間と他者』である。これはレヴィナスが戦後初めて書いた哲学的著作であり、彼の思想の出発点とも言えるものだ。だが、このテキストは極めて難解であり、多くの読者が挫折してきた。内田氏は、この講義をほぼ逐語的といつてよいほど徹底的に精読、註解、解釈する。その過程で内田氏は、ハイデガー存在論の基本的な結構を覆す「時間と他者」という問題に、レヴィナスがいかに取り組んだかを明らかにしていく。

他の講義への言及はみられず、彼の思想を「シヨアー」（ユダヤ人の大量殺戮・ホロコースト）と結び付ける仕方は短絡的かもしれない。また一九四六／七年のこの講義を、一九八〇年代に行われた晩年の熟成された思想を示すインタビューから説明するのも時間的・論理的飛躍があると言わざるをえない。さらにヘブライ語聖書の読者は、いわゆる「俗語源解釈」によって「人」（アダム）が「土」（アツダーマー）から創造され、「イサク」が「笑い」（彼は笑う、イッハアーク）から名付けられたことも知っていよう。ならば「存在」（イェーシユ）と「眠り」（イヤーシェーン）との間の何らかの関係にも思い至るべきだったかもしれない。とい。

とはいえ、このようなレヴィナス思想に対する「逐語註

解」とも呼べる試みは世界でも初であり、欧米諸国にも類書は存在しない。内田氏の「師」への深い敬愛の念を存分に伝えるものであると同時に、日本の研究水準の高さをも示すものだ。本書は、難解なレヴィナスの思想を読解するまさに苦闘の現場に立ち会わせてくれる書であり、彼の思想に興味を持つ読者にとっては貴重な入門書となるだろう。それにしても、わずか四回の講義にこれほどの註解を捧げねばならぬレヴィナスとはどれほど難解な思想家なのだろう？ 三部作と言わず、続巻を送り出して欲しいところだが、まずは、このような名著を世に送り出した著者の力量と前代未聞の企画を実現した出版社を言祝ぎたい。

（まつまる・かずひろ 哲学者）  
（四六判・四三三頁・定価二八六〇円・新教出版社）

信仰の中核である三要文を  
じっくり味わうシリーズ

説教黙想アレテア叢書  
さんようもん しんどうく  
**三要文 深読**  
十戒・主の祈り  
使徒信条



【執筆陣】朝岡 勝／荒瀬  
牧彦／楠原博行／小泉 健  
／須田 拓／高橋 誠／服部  
修／平野克己／広田叔弘  
／本城仰太／宮崎 薫／安  
井 聖／吉田 隆／吉村和雄

教会の信仰の大黒柱となる使徒信条・十戒・主の祈り。この三要文のじっくり味わい、深く読むシリーズ全2巻。説教者はもちろん、信徒にもぜひ読んでいただきたい。『説教黙想アレテア』108号～111号から書籍化。横組みとなつてより読みやすくなっている。

日本キリスト教団出版局  
〒169-0051 東京都新宿区西早稲田2-3-18  
☎03-3204-0422 ☎03-3204-0457  
E-mail eigyou@bp.ucci.or.jp (価格10%税込)  
<https://bp-uccj.jp>

## キリストに倣う者として、 動物との関係を再考する

〔評者〕 竹之内裕文



### 動物という隣人

共感と宗教から考える動物倫理  
鬼頭葉子著



「なぜ肉を食べるのか」——大学院生時代に留学先のドイツで、ペスタタリアン（魚菜食主義者）の友人に問われた。その後もベジタリアンやビーガンの知人と食事を共にするたび、この問いを突きつけられた。早いもので、最初の問いかけから25年が経つ。真摯に問い続けてきたつもりだが、いまだ肉食を絶つにいたっていない。どこか納得のゆかない部分が残っていたのだ。

白神山地のマタギのもとへ通い続け、狩猟採集の知・技とそれを支える生態・死生観にふれてきたことも大きい。マタギは神々に感謝し、すべての生き物に敬意を表しながら、生態系のうちで、いのちに与って生きる。生きるためには、食べなくてはならない。食べるためには、動物と植物の別なく、生き物を殺さなければならない。

マタギの理解とは対照的に、従来の動物解放論・権利論

的に「関係」に依拠したものであり、動物との関係を離れて「動物の権利」を語ることはできないのだ。

本書の特徴は、宗教哲学・倫理とキリスト教神学の先行研究を広く視野に収めて「動物倫理」と「共感」の思想史を描き出す点、また「食の神学」を踏まえて肉食と動物倫理について考察する点にある。以上を経て、多様な動物（畜産動物、伴侶動物、野生動物など）を包摂する、動物倫理の「権利・共感・宗教モデル」が提唱される。

本書の読者は著者とともに、長い探究の旅路を歩むことになる。しかし、次のいずれかの問いを携えているならば、その旅路は発見と喜びに満ちたものになるだろう——キリストに倣う者としてなにを食べたらよいのか、動物とどうつき合ったらよいのか。

本書では「隣人としての動物」という神学者ダニエル・ミラーの見方が紹介され、掘り下げられる。イエスのたとえ話に登場するサマリア人は、ある旅人が傷ついて路上に倒れているのに気づく。それを見て、かれは具体的な行動へ駆り立てられる。当人の苦しみ・痛みを感じとってしまい、もはや他人事と片づけられないからだ。話の発端は、「わたしの隣人とはだれですか」という相手の質問にある。イエスはこれに答えず、たとえ話の後に相手に問いかける

では、苦痛を感じる能力や自己意識の有無を基準に、動物と植物のあいだに一線が引かれてきた。動物を食べることは差し控えるが、植物についてはほとんど意に介さない。人間が設定する恣意的（人間中心主義的）な基準によって可食／非可食の境界線が定められるのだ。

生き物と生態系のかかわりをどう捉えるか、それを踏まえて生き物（人間）が生き物を殺して食べるという日常の営みをどう考えるか。この点で著者は、評者とやや見解を異にする。ただそれは本書の価値を損なうものではない。著者は「理性」（正義・権利）と「感情」（ケア・共感）の関係を相補的に捉え、従来の動物解放論・権利論を踏み越えていく。「権利」の成立基盤は、生き物が抱える「脆弱性」——他者と環境への依存性と死を免れない有限性——とこれに対する「共感」に求められる。「権利」とは基本

——「だれが隣人になったか?」。

最後の問いかけとともに、対話の局面は大きく転換する。だれが隣人に該当するかという線引き問題は解消され、一人ひとりと出会い、どのように関係を築いていくのかがクローズアップされる。人種や宗教などの異同は、もはや指針を提供できない。隣人に対してどのような態度をとるべきか、イエスはこの点でも具体的な基準を示さない。相手の苦しみを目の当たりにするとき、わたしたちは憐れみ・慈愛（compassion）に突き動かされ、具体的な行動へ背中を押される。そこで具体的にどのような態度・行動をとるか、それは一人ひとりの判断に委ねられるほかない。それこそ各人の生の課題であるからだ。

動物を「隣人」と捉えるとき、これと同様の転換が生じる。相手の動物とどのような関係を築き、どうやって共に生きていくのか、それは各人の生の課題である。ただ同時にわたしたちは、それぞれの出会いと共生の経験を携えて対話を試みることができる。それを通して多種の生き物に応接するふさわしい態度について、社会的な共通理解が築かれるだろう。

（たけのうち・ひろぶみ 静岡大学教授）

（A5判・四〇〇頁・定価五九九五円・新教出版社）

## 預言者的・官憲的宗教改革 「第二世代」の深みと広がり

〈評者〉大石周平



ハインリヒ・ブリンガー  
ヨーロッパ宗教改革  
堀江洋文著



宗教改革第二世代に関心を持ち続けてきた一麦出版社から、本邦初となる本格的なブリンガー伝が出版された。ジュネーヴのカルヴァンに勝るとも劣らない「改革派の伝統のもう一人の立案者」（二六一頁）に、ようやく相応しいスポットが当たる。

著者は、十六世紀以降の歴史や社会制度に関する諸論文のほか、訳書『ヨハネス・ア・ラスコ1499-1560 イングランド宗教改革のポーランド人』でも知られる堀江洋文氏。米国ベテル神学校（修士）や英国ケンブリッジ大学（博士）、スイス・チューリヒ大学宗教改革研究所（在外研究）に学ばれて以来の、長年にわたる論考がまとめられ、ここに書き下ろされた。米国ではイタリア人改革者ヴェルミリー研究、イングランドでは国政史や古文書学、スイスでは鋭意進行中だったブリンガー書簡編纂に携わる

最先端の研究者との対話が、本書に反映している。

カラー写真で現地に思いを馳せ、早速序論（Ⅰ）と研究小史（Ⅱ）を読み始める。すると本書が、一万二千通に及ぶ書簡にも目配せをし、「国際ブリンガー主義」（一四頁）ともいべき相関関係を意識して執筆されたことがわかる。改革者の生い立ち（Ⅲ）であれ、神学（Ⅳ）であれ、ブリンガーを語ることは、「ヨーロッパ宗教改革」を語るに等しい。イングランドとの、あるいはイタリア人改革者との関係が整理される最終章（Ⅴ）に至る頃には、ルター派から（再）洗礼派まで、あるいは改革派内部でも、一枚岩とはいかない福音主義陣営の中で、ブリンガーがいかなる存在感を示したか、過大・過小のいずれの評価にも陥らない適切なイメージを抱くことになる。

今からちよど五百年前の一五三三年、ブリンガーは齡

十八にして、カッペル修道院附属の学校長となる。本書によれば、同校での人文主義的な教育論とカリキュラムが、ツヴィンゲリ創設の教育的聖書研究機関「プロフェツァイ」（預言）に流れ入り、改革派の神学教育の基礎を据えた。三一年、四十七歳で急逝したツヴィンゲリを継ぐ者と認められた二十歳年下のブリンガーは、敗戦に傷つく時代の「預言者」として、改革を牽引する立場に立たされる。その後七十一歳で死去するまで、チューリヒから離れずに根を張って、亡命者や留学生と交流し、世界に呼びわり枝葉を広げたことは、改革派の一大牙城として同市が立つたための大きな力となった。

「預言者的」務めの第一は、ペスト禍中の「遺言」として書かれた「第二スイス信仰告白」にあるとおり、神の言葉そのものを取り次ぐ説教である。本書を読み、附録の説教集『セルモナム・デカデス』の抄訳にふれるにつれ、当時一級の影響力をもった説教集全編が日本語で公刊される日を、待ち望まずにはおれない。邦訳された書簡二つを含む附録からは、予定説に関するブリンガーの「穏健な」立場と、それに満足できない批判者との緊張も示される。二重予定説をめぐるカルヴァンとの距離感については、聖餐理解や契約神学にも関わる主題として紙幅が割かれ、ブリ

ンガー没後のドルトレヒト会議にまで射程が伸びる。

もう一点、注目されるブリンガー神学の特徴は、その「官憲的」性格である。同僚レオ・ユートが主張した「政教分離」に対し、彼は教会と市政府の密接な関係をとおして、キリストのもと世俗世界をも包括的に捉えた。本書で最も学術的な厳密さが示される論考の一つは、婚姻法と裁判制度についてジュネーヴとの比較がなされ、中世カノン法からピューリタニズムの倫理に至る史的影響関係が問われる部分である。陪餐停止を伴う破門権の行使により市民生活を監視したジュネーヴ教会と、カトリック司教管轄の裁判所が介入する道を閉ざすべく、風紀取締りを当局に委ねたチューリヒ教会。後者では、一方の市政府側から、牧師が政治に口出しせぬよう働きかける向きもあったが、対するブリンガーは、神の言葉に生きる者の、世に対する批判的言論の自由を擁護し、預言者的自由と官憲的責務とのバランス感覚を示した。社会との接点を今問い直すべき日本の教会が、「預言者的にして官憲的な」改革教会の伝統から学ぶべきことも、やはり多いのだと思わされる。

（おおいし・しゅうへい 日本キリスト教会多摩地域教会牧師／カルヴァン・改革派神学研究所属長）

（菊判・二八〇頁・定価五七二〇円・一麦出版社）

## 新約テクニストの 新たな解釈への道標

〔評者〕 吉田 新



烈しく攻める者が  
これを奪うII  
新約学論文・講演集  
住谷 眞著



本書の著者である住谷眞氏は牧師として教会に仕える傍ら、フルートを奏で、歌人として短歌を詠み、ダンテの神曲についての著作も公にしている。様々な顔を持ち合わせている氏であるが、聖書学者として新約聖書と真摯に向き合い続けることが、多芸多才な氏の活動の根底にあるように思える。

本書は住谷氏が先に上梓した論文集『烈しく攻める者がこれを奪う―新約学・歴史神学論集』一麦出版社（二〇一四年）の続編という性格をもっており、二〇一五年以降に発表した研究論文、講演録の集成である。主に新約テクニストの新しい解釈と翻訳を提案している。

評者は翻訳者、及び編集委員の一人として、住谷氏と共に聖書協会共同訳の事業に携わった。個人訳とは異なり、日本聖書協会が発行する聖書翻訳は共同作業である。それ

ゆえ、訳文に関して持論を押し通すのではなく、他の翻訳者、編集者と共に訳文を練っていくことが重んじられる。

濃厚かつ協調性を尊ぶ住谷氏はこの事業には適任であった。氏は自身が提案する訳文に対する修正意見が出された際、それらの意見を取り込みながら皆が納得いく訳文へと見事に仕上げていった。時に氏は斬新な訳文を提案し、自説を展開することもあった。学識に支えられた氏の訳案はとも説得力があり、何度もハッとさせられたことを覚えていた。本書を読むと、その時の驚きと感動が呼び起こされた。

例えば、本書の「ヤコブの手紙3・6aの新しい解釈と翻訳をめぐって」では、「そして舌は火、悪の世界である。それはわたしたちの肢体のうちに置かれている」という従来の翻訳とは異なり、「そして舌は火である。わたしたちは肢体にあつて不義の世界となっている」という新たな訳

案を打ち出している。ヤコブの手紙全体の論理の流れを鑑みつつ、この訳文の意義を詳細に説いている。さらに「ルカによる福音書2・49の新しい解釈と翻訳をめぐって」では、「わたしの父のものである人々の中（間）にいることになる」という訳の妥当性が解説される。この訳案に関して、ルカ福音書の文脈、特徴的な用語の分析、そして同福音書の対応関係等から説明される。さらに、「イエスは『仕事』（ビジネス）や『家』に在るべきであるよりも、まず『人々の間に』いなければならない。それは、その在り方が人間の条件であるからである」（五二頁）と説かれ、ハンナ・アーレントの言説が紹介されている。ごく短い訳文の提案であるが、ルカ福音書全体、そして、イエスとは何者であったのかという大きな問いから考察されていることが分かる。氏のこれまでの学究の深さと幅の広さを感じさせる。他にもコリントの信徒への手紙二11・21、ヨハネによる福音書20・17ab、ヨハネの黙示録22・2の新しい解釈と翻訳に関する考察においても、そのことを感じさせる。

本書において住谷氏が論じる解釈と翻訳案は、それまでの通説を覆すような創見に富んでいる。いずれも説得的で納得させられることが多い。本書を手にする者は、氏の提

案を踏まえて、再度、原典と向かい合うことを促されるはずだ。本書は読者一人一人が、新約テクニストを新たに読み直すための道標となる。従来の学説に立脚するこれまでの研究を取り上げ、批判的に向かい合う箇所、先行研究に関する住谷氏の見解をもう少し詳しく聴きたいと思った。各論文が発表された際に字数の制約があったのかもしれないが、独自の見解は、従来の学説と対決的に突き合わせることでより説得力を持ち、読者を深い考究へと導けるはずである。

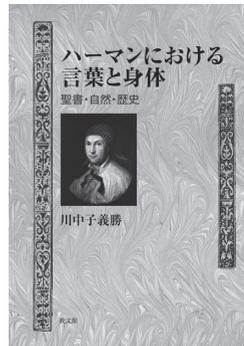
本書では今後のさらなる研究も期待させる箇所も多々ある。たとえば「ヨハネによる福音書1・14―18が編集者による翻訳をめぐって」では、同書の1・14―18が編集者による加筆挿入であると判断されているが、その理由は詳しく論じられていない。住谷氏はあとがきで、本書をもって「私の学問的営為の区切りとしたいと考えております」と述べているが、その区切りをつけるのはまだ早いのではないかと評者は考えている。通説の壁を打ち破る氏のさらなる学問的営為を心から待ちたい。そう強く思わせる良書である。

（よしだ・しん 東北学院大学文学部教授

一麦出版社）

ハーマンとの  
出会いの道案内

〈評者〉  
宮谷尚実



ハーマンにおける  
言葉と身体  
聖書・自然・歴史  
川中子義勝著



「私は自分の心が脈打つのを感じた。心の深みで一つの声が呻き、嘆くのを聞いた。あたかも殺された兄弟の血の叫びのように。もしも私とその声に聴かず耳を閉ざし続けるなら、その血に報いんとするかのように。[...] 私はもはや神に隠しおおせなかった。自分が〔カインの如き〕兄弟殺し、神の独り子を手にかけて兄弟殺しであることを」(NII 41、本書四五頁)。

異国での失意と孤独と困窮の果てに手に取った聖書を読み進めていた二十七歳の青年に、回心の瞬間がやってきた。この「自己認識の地獄墮ち」のただなかで、人間の「愚かさ」まで自らを低くする神の深い愛とキリストの十字架による救いを実感し、「神の独一的な働き」による全存在の変革をもたらされたヨハン・ゲオルク・ハーマンは、近代ヨーロッパの啓蒙主義を内側から批判する文筆活動を開始

本書『ハーマンにおける言葉と身体——聖書・自然・歴史』は、川中子氏によるハーマン研究の集大成であり、ヘーゲル、キルケゴール、ベンヤミンなど、後世までインスピレーションを与え続けたハーマンに接近するために恰好の案内書である。第一章でハーマンの生涯と思想の全体像が提示され、第二章から第六章では「言葉」「身体」「自然」「歴史」を鍵概念として、聖書解釈にもとづくハーマン独自のキリスト教思想が同時代の啓蒙主義者との対峙から読み解かれていく。その際、第一章で示されていた主題が変奏曲のごとく繰り返し現れる。「十字架の愛言者 (Philologus crucis)」ハーマンが〈対話〉の相手や状況に応じて「啓蒙の克服すべき闇」(本書一六五頁)を示すその指の動きを読者がつぶさに追うことを可能にする仕掛けといえよう。

本書の魅力は、ハーマンとの時空を超えた実存的で人格的な「真の出会い」(本書二一六頁)が描かれた後半にある。著作を通してハーマンと出会ったキルケゴール(第七章「『実存』の系譜」、最晩年のハーマンと「エキユメニカル」な出会いを得たガリツィン侯爵夫人(第八章「ハーマンとミュンスター・クライス」)、そしてなによりもユニークなのは、著者自身の共感と実感をもってハーマンと

する。その主たる活動の場は東プロイセンのケーニヒスブルク、この町にはイマヌエル・カントもいる。ハーマンは、かねてから交友関係にあったカントに『純粹理性批判』の出版元を紹介した一方で、書評や著作『理性の純粹主義へのメタクリティク』によって痛烈な批判を浴びせた。

ハーマンの著作は対峙する相手自身の言葉を身にまといつつ、引用、譬え、暗示、ユーモアやイロニーを駆使した挑発的な文体を特徴とするため、当時から難解とされてきた。日本でハーマンの異名 Magnus in Norden がながらく「北方の魔術師」と誤訳されていたのもその著作が表面的な読解を拒むゆえだろう。二〇〇二年、本書の著者である川中子義勝氏が『北方の博士・ハーマン著作選』(沖積舎)により、カント批判を含むハーマンの代表作を翻訳と解説で日本の読者に届けたことは画期的な出来事だった。

「信の類比」(本書二四四頁)で結びつけられた内村鑑三(第九章「聖書と天然と歴史」)だ。これらの章から読み始め、適宜前半に立ち戻る読み方も良いだろう。

ハーマンの聖書論や信仰に関する思想を中心とした本書ならではの工夫は巻末の聖句索引にある。第二章で聖書とハーマンとの関わりが詳述されているが、回心に至るまでの自伝的文章『我が生涯を憶う』や聖書読解の記録『キリスト者の聖書考察』(いずれも一七五八年)については、いまだ日本語訳が待たれる状態である。川中子氏には今後ともハーマンとの深い出会いへの道案内をお願いしたい。

(みやたに・なおみ 国立音楽大学音楽学部教授)  
(A5判・三一八頁・定価五二八〇円・教文館)

編・著・訳者	書名	判型	頁	定価(税込)	版元	発行日
マルティン・ブーバー著 ／ 稲村秀一訳	義を求める祈り —正と悪をめぐる『詩篇』黙想	新書	248	1,650	ヨベル	5/25
柏木貴志	アウグスティヌス —古くて新しい物語	四六	236	3,080	教文館	5/24
アドルフ・フォン・ハル ナック著／津田謙治訳	マルキオン —異邦の神の福音	A5	310	5,060	教文館	5/24
ゼバスティアン・フラ ンク著／福原嘉一郎訳 ／安酸敏眞解説	パラドクサ	A5	396	3,960	教文館	5/24
大沼隆	困惑を超えるもの —大沼隆遺稿説教集	B6	320	1,650	教文館	5/24
日本キリスト 教団出版局編	説教黙想アレテイア叢書 三要文深読 —使徒信条	A5	216	2,640	日本キリスト 教団出版局	5/25

既刊案内 (2023年4月～2023年5月)

編・著・訳者	書名	判型	頁	定価(税込)	版元	発行日
ヴァルター・リユティ著 ／ 宍戸達訳	コヘレトの言葉 —人生を生きよ	四六	221	2,310	新教出版社	4/4
山口希生	ユダヤ人も異邦人もなく —パウロ研究の新潮流	四六	240	2,475	新教出版社	4/21
住谷眞	烈しく攻める者が これを奪うII —新約学論文・講演集	A5	148	4,180	一麦出版社	4/7
神保タミ子	新装改訂版 脱会 —今こそ知っておくべき統一 協会の実像	四六	216	1,650	キリスト新聞社	4/10
館正彦	神田錦町二丁目	四六	114	1,000	キリスト新聞社	4/20
荒川朋子	共に生きる「知」を求めて —アジア学院の窓から	新書	240	1,320	ヨベル	4/20
関川泰寛	キリスト教古代の思想家たち —教父思想入門	新書	304	1,650	ヨベル	4/20
A. トムソン著 ／ 持田鋼一郎訳	アシジのフランシスコの生涯	四六	314	3,630	教文館	4/25
春名純人	カルヴァンの救済の神学 —救いの恵みの漸層法	A5	200	4,180	教文館	4/25
大島力	VTJ旧約聖書注解 イザヤ書1～12章	A5	202	4,400/ 9月ま で特価 3,960	日本キリスト 教団出版局	4/25
日本キリスト 教団出版局編	説教黙想アレテイア叢書 三要文深読 —十戒・主の祈り	A5	208	2,640	日本キリスト 教団出版局	4/25
J・P・ラジャシェカー 編著／宮本新訳	アジアの視点で読む ルターの小教理問答	四六	213	1,100	リトン	5/9
石田学	第一ペトロ書を読む —釈義と説教	四六	210	2,200	新教出版社	5/18
金香花	神と上帝 —聖書訳語論争への新たなア プローチ	A5	210	4,400	新教出版社	5/25
富坂キリスト教センター 編／山下明子、山口里 子、大嶋果織、堀江有里、 水島祥子、工藤万里江、 藤原佐和子著	日本におけるキリスト教 フェミニスト運動史 —1970年から2022年まで	B5	216	2,750	新教出版社	5/25
ルイ・ギグリオ著 ／ 田尻潤子訳	「敵」に居場所を与えるな —あなたの人生を変える— 詩編23編からの発見	四六	246	1,870	ヨベル	5/19
遠藤勝信	愛の心を育む —大学チャペルでのキリスト 教講話	新書	186	1,210	ヨベル	5/19

書店名	郵便番号	住所	電話	ファックス	URL	メール	郵便振替
北海道キリスト教書店	060-0807	札幌市北区北七条西6丁目	011-737-1721	011-747-5979	http://www.jp-shop.com	sasaki@jp-shop.com	02770-2-56520
善隣館書店	020-0025	盛岡市大沢川原3-2-37	019-654-1216	共用		zenritkan_syoten_0530@ghoo.co.jp	02350-0-874
仙台キリスト教書店	980-0012	仙台青葉区1-36 東北センター・イマif	022-223-2736	共用		fcwkwk524@ybb.ne.jp	02230-0-31152
恵泉書房	260-0021	千葉市中央区新富2-2 千葉カリアセンタービル	043-238-1224	043-247-3072	http://www.keisen.christian.jp	keisen@vestia.ocn.ne.jp	00120-9-43619
教文館	104-0061	東京都中央区銀座4-5-1	03-3561-8448	03-3563-1288	http://www.kyobunkwan.co.jp	xbooks@kyobunkwan.co.jp	00120-2-11357
待豊堂	167-0053	東京都杉並区西荻南3-16-1	03-3333-5778	共用	http://taishindo@jimbo.com/	taishindo@jimbo.com	00110-8-95827
バイブルハウス青山	104-0061	東京都中央区銀座4-5-1	03-3567-1995	03-3567-4435	http://biblehouse.jp	biblehouse@bible.or.jp	00160-2-18410
東京キリスト教書店	162-0814	東京都港区新小川町9-1日キ坂内(外観専門)	03-3260-5663	03-3260-5637		tokyo@nikkikan.co.jp	00130-3-60976
横浜キリスト教書店	231-0063	横浜市中区花咲町3-96	045-241-3820	045-241-5881	http://www.lighting.jp/~yokohama/s/index.html	sksch@mva.biglobe.ne.jp	00250-4-2512
清光書店	951-8114	新潟市営所通一番町313	025-229-0656	共用		info@s-seibun.co.jp	00560-8-51419
静岡聖文舎	420-0866	静岡市葵区西草深町20-26	054-260-6644	054-260-5612	http://www.s-seibun.co.jp/	info@s-seibun.co.jp	00810-8-26558
名古屋聖文舎	464-0850	名古屋市中区今池5-28-4	052-741-2416	052-733-2648	http://nagoya-seibunsha.la.coccan.jp/	nagoya-seibunsha@nifty.com	00810-5-14073
京都ヨルダン社	602-0854	京都市上京区荒神口通河原町東入ル	075-211-6675	075-211-2834	http://web.yoridan-net.or.jp/people/kyotan/	kyotan@mbox.kyoto-net.or.jp	01010-2-594
大阪キリスト教書店	530-0013	大阪市北区茶屋町2-30	06-6377-6026	06-6377-6027	http://osekacbs.web.fc2.com/	ochrbook@river.ocn.ne.jp	00990-3-43009
神戸キリスト教書店	650-0021	神戸市中央区三宮町3-9-18三陽ビル2F	078-331-7569	078-945-9388		kobex@nikkikan.co.jp	00170-2-421390
広島聖文舎	730-0841	広島市中区舟入町12-7	082-208-0022	082-208-0177		hseibun0951@yahoo.co.jp	01360-4-1958
リバーサイドブックス	779-1105	徳島県阿南市羽ノ浦町古庄大道ノ西13	090-8694-4986	050-3142-3017		ykwb3@gmail.com	16220-17974891
松山キリスト教書店	790-0804	松山市中一丁目1-23	089-921-5519	089-921-5413	http://www.gotops.jp/roads/yatai_107/index.html	sksch@doki.doki.ne.jp	01650-1-2120
北九州キリスト教ブックセンター	802-0022	北九州小倉北区上富野5-2-18	093-967-0321	共用		kcbookcenter@bible.or.jp	01780-4-39965
新生館	810-0073	福岡市中央区舞鶴2-7-7	092-712-6123	092-781-5484	http://www.sinseikan.jp/	info@sinseikan.jp	01750-5-10932
キリスト教書店ハレルヤ	862-0971	熊本市大江4-20-23	096-372-3503	共用		k-haleruya@bible.or.jp	00160-2-18410
沖縄キリスト教書店	904-2143	沖縄県沖縄市知花4丁目12-33	098-927-0220	098-938-1102	https://www.okinawacts.net	info@okinawacts.net	01790-4-152916

※一般書店関係の方は 日キ販営業部 TEL 03-3260-5670 にご連絡ください。

# 大貫隆

## グノーシス研究拾遺

### ナグ・ハマディ文書からヨナスまで



グノーシス主義の探究は新約聖書研究にとって不可欠・不可分の関係にあるとの信念から日本のグノーシス研究を長く牽引してきた著者が、ナグ・ハマディ文書の全体像からヨナスの労作『グノーシスと古代末期の精神』までを逍遙し、グノーシス研究の道行きに散りばめられていた智の欠片を拾い集めた待望の書。 四六判上製・三六八頁・二七五〇円

ヨハネ福音書解釈の根本問題 プルトマン学派とガダマーを読む 反響！・一九八〇円  
 原始キリスト教の「贖罪信仰」の起源と変容 編集集中！ \* 8月刊行予定

# 山口里子

## マルコ福音書をジツクリと読む



福音書のマルコの思いと、その基にあるイエス自身の思い・行動を、学び考える。聖書を原語で読み、時代背景を学ぶ。古代エリート男性の父権的な価値観が、福音書著者たちも浸み込みつつ抵抗もして編集した。現代の私たちはそれをどう読むか。この難問に、公開講座の仲間たちとともに学び、様々な人生経験と豊かな思いを分かち合う！

青野太潮 どう読むか、新約聖書 福音の中 一、二一〇円  
 青野太潮 どう読むか、聖書の「難解な箇所」 「聖書の真実」を探究する 一、三三〇円  
 山口希生 「神の王国」を求めて 近代以降の研究史 一、八七〇円  
 関川泰寛 キリスト教古代の思想家たち 教父思想入門 一、六五〇円

# 松下景子

## 語らいと祈り



人は語らいながら、告白しあいながら、深刻で重い問題自体は変わらないものの、そこから解放されていく。藤掛 明氏 信仰の12ステップに 取り組んだ人々の物語

ルイ・ギグリオ 田尻潤子訳  
 「敵」に居場所を与えるな 反響！ 四六判上製 一八七〇円  
 あなたの人生を変える——詩編23編からの発見「そんなのムリ」「逃げ道はない」「あつちのほうがいい」「こうしたい思いがあったの」「敵」ヤバイ奴なのだ！

金子晴勇 キリスト教思想史の諸時代VII 現代思想との対決  
 I ヨーロッパ精神の源流【既刊】  
 II アウグスティヌスの思想世界【既刊】  
 III ヨーロッパ中世の思想家たち【既刊】  
 IV エラスムスと教養世界【既刊】  
 V ルターの思索【既刊】  
 VI 宗教改革と近代思想【既刊】  
 VII 現代思想との対決【既刊】  
 別巻1 アウグスティヌスの霊性思想【次回配本・編集集中】  
 別巻2 アウグスティヌス三位一体論研究【第9回配本】

本巻全7巻完結！  
 新書判・平均272頁  
 各巻1320円

# 福音と世界

## 2023年8月号

特集 戦争の時代に平和を問う

寄稿者 浅野淳博、徳田信、山中弘次

石川明人、朴賢淑、松隈協

好評連載 八木重吉の聖書（今高義也私は告白する、私の神を（長尾優）、地域から考える在日朝鮮人史と教会史（金耿笑、グレイト小林と三人の女（飯田華子）、神と「女性的なるもの」を辿って（後藤里菜、古代イストラエル文学史序説（勝村弘也）ほか

A5判・定価660円・〒70円  
定期購読についてはお気軽にご相談下さい。

新教出版社 TEL: 03-3260-6148  
Email: sales@shinkyō-pb.com

### から室集編

カルトが社会問題として世間の耳目を集めるようになったのは、昨年7月の安倍晋三元首相銃撃事件がきっかけです。1990年代の統一協会の合同結婚式やオウム真理教による地下鉄サリン事件を思い出した方も多いのではないかと思います。そこから現在に至るまでの約30年間、メディアで取り上げられないだけで、カルト宗教による被害が連綿と続いていたことは、2世問題が顕在化したことから自明です。

とはいえ、カルトは宗教に限ったことではなく、政治、消費生活、家庭、学校、職場など、人間関係が存在するあらゆる場における支配・非支配の関係から起こりうる人権侵害だと言われます。特に「しつけ」の名のもとに起こる

### 予告

#### 本のひろば

2023年9月号

#### 本・批評と紹介

（書評）A・トムソン著『アシジのフランシスコの生涯』ロバート・キエサ訳・注解『イエズス会の規範となる学習体系（二五九九年版）』『羅和対訳』ゼバステイアン・フランク著『パラドクサ』山口希生著『ユダヤ人も異邦人もなく』石田学著『第1ペトロ書を読む』関西学院大学キリスト教と文化研究センター編『ことばの力』関川泰寛著『キリスト教古代の思想家たち』マルティン・ブーバー著『義を求める祈り』他

親による子への支配は注意すべきカルトの萌芽であるという識者の意見を聞いた時には、我が身を振り返り、空恐ろしくなりました。そのことをカルトに詳しい知人に言っていると、「そついう自覚があればカルトにはならないよ」と返され、教育ママのレベルだったかもとホッとしました。

でも、油断は禁物です。社会の最小単位である家庭から社会まで、それぞれのカルト性に自覚的であることが大切ではないかと思う今日この頃です。（市川）

#### ※編集部よりお知らせ

これまで「〜なら この三冊！」というタイトルでお送りしてきた冒頭の特集記事ですが、今号より「シリーズこの三冊！」としてお送りします。それに伴い表紙での表記も若干変更します。内容はこれまで通りですので、今後ともお楽しみください。

# カール・バルト

神の自由な恵みへの賛美！

## 《教会教義学》の世界

7月11日



寺園喜基著 邦訳で36巻に及ぶ、20世紀の神学的記念碑ともいへべき《教会教義学》の内容を、一般読者に向けて平易に解説。神学自体への無二の入門書でもある。

◆四六判・定価3080円

大反響

## 日本におけるキリスト教 フエミニスト運動史

1970年から2022年まで

富坂キリスト教センター編

この半世紀余の激動の時代を、詳細な年表と解説、コラム記事で丹念に辿る。また4人の女性の証言とインタビュー、さらにメディア表象、

女性への接手の進展、結婚式文の問題、異性愛規範への抵抗など6つの重要課題を考察。本書は画期的な労作であり、今後この分野を論じる上で不可欠の文献となるだろう。学校・教会に必備。

◆B5判・定価2750円



## ユダヤ人も異邦人もなく

山口希生著 パウロ研究の新潮流

パウロの宣教とは？



信仰義認を重視する従来のパウロ理解に異議を申し立て、20世紀後半から新約学界で激しい論議を呼んでいる「パウロへの新しい視点」(NPP)。本書は19世紀のパウルから21世紀のバークレーまで解説。本邦初のNPP本格入門書。

大反響

◆四六判・定価2475円

## 第一ペトロ書を読む

釈義と説教

石田学著

迫害に苦しむキリスト者への熱いメッセージを読み解く。

◆四六判・定価2200円

## 神と上帝

聖書翻訳の反復性！ ◆A5判・定価4400円

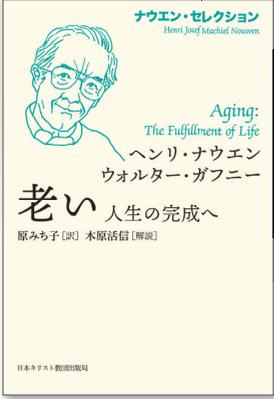
金香花著 聖書訳語論争への新たなアプローチ

19世紀中国での聖書翻訳における訳語論争を手掛かりに、その後の朝鮮語と日本語における聖書翻訳とを比較、さらに、それを近年の発達めざましい聖書翻訳理論と付き合わせ、そもそも聖書翻訳とは何かに迫った意欲的な研究。



日本キリスト教団出版局 〒169-0051 東京都新宿区西早稲田2-3-18 TEL03-3204-0422 FAX03-3204-0457  
e-mail eigyou@bp.uccj.or.jp ホームページ https://bp-uccj.jp (価格10%税込)

20世紀を代表する霊的指導者ナウエンの名著セレクション、最新刊! **第5回 配本**



### ナウエン・セレクション

# 新しい 人生の完成へ

ヘンリ・ナウエン  
ウォルター・ガフニー  
原みち子 訳 木原活信 解説

ナウエンが「新しい」を語る注目作。福音の光に照らすとき、新しいは、隠したり否定したりすべきことではなく、人生の完成に向かう成長の道のりであることがわかる。他者を世話(ケア)することの深い意味をも明らかにする。

2023年7月25日刊行予定 ◆四六判 並製・144頁・定価1,980円

発行所 〒163-0814 東京都新宿区新小川町九-1 一般財団法人キリスト教文書センター  
電話03-3361-6511 振替00170-51170  
発行人 金子和人 編集人 桑島大志 印刷所 モリモト印刷  
発売所 日本キリスト教出版株式会社 電話03-3361-6570

シリーズ好評発売中

『今日のパン、明日の糧 —暮らしにいのちを 吹きこむ366のことば』 定価2,640円	『死を友として生きる —「最大の贈り物」&「鏡の向こう」』 定価2,420円
『アダム — 神の愛する子』 定価2,200円	『傷ついた癒やし人 新版』 定価1,980円

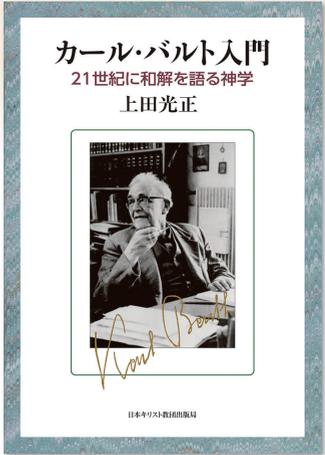
## カール・バルト入門 21世紀に和解を語る神学

上田光正

2023年7月21日刊行予定

危機神学として日本の教会に多大な影響を与えたバルト神学。21世紀に入り、分断と対立が深刻化する今日、著者は「和解の神学」としてのバルトの価値にも目をとめる。バルト神学はお互いの正義をかざして裁きあう現代世界(万人の万人に対する闘争の世界)に対して福音なのである。

◆A5判 並製・176頁・定価2,640円



本のひろば.com



定価七八円(税抜七一円) (¥63円) 一年分一三〇〇円(送料共)